

2025 年 7 月 6 日（日）「二頭の獣」

ヨハネの黙示録 13:1-10

1 また私は、一頭の獣が海から上って来るのを見た。その獣には十本の角と七つの頭があり、角には十の王冠、頭には神を冒瀆する名があった。2 私が見たこの獣は豹に似ていて、足は熊のようで、口は獅子のようであった。竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた。3 獣は頭の一つに死ぬほどの傷を受けたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。4 竜が自分の権威をこの獣に与えたので、人々は竜を拝んだ。人々はまた、この獣をも拝んでこう言った。「誰がこの獣と比べられよう。誰がこの獣と戦うことができようか。」5 この獣にはまた、大言と冒瀆の言葉を吐く口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。6 そこで、獣は口を開いて神を冒瀆し、神の名とその幕屋、天に住む者たちを冒瀆した。7 獣は聖なる者たちと戦い、これに勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、言葉の違う民、国民を支配する権威が与えられた。

8 地上に住む者で、屠られた小羊の命の書に、天地創造の時からその名が記されていない者は皆、この獣を拝むであろう。9 耳のある者は聞かぬがよい。10 捕らわれるべき者は、捕らわれて行く。剣で殺されるべき者は、剣で殺される。ここに、聖なる者たちの忍耐と信仰がある。

【序論】

今日からいよいよ黙示録 13 章に入ります。この章には、「海から上がってくる獣」と呼ばれる、ちょっと不気味な存在が登場します。映画のワンシーンのようなこの描写に、初めて読む方は若干「怖い」という感覚を覚えるかもしれません。逆に、こういう象徴的なビジョンにワクワクする方もおられるでしょうか。実はこの箇所——「どう理解するか」によって、信仰の視野が広がるか、逆に狭まってしまうか、分かれ道にもなるような大事なところなのです。なぜなら、この 13 章は「終末論」と呼ばれるテーマの中でも、とりわけ立場の違いが現れる部分だからです。

- ・ どんな順番で何が起きるのか
- ・ 「千年王国」とは何か
- ・ 「獣」とは何者なのか

聖書を真剣に読む人ほど、これらの問いに直面することになるでしょう。もちろん、救いに関する核心的な部分——たとえば「イエスが主であること」「再び来られるという約束」——こうした土台は、すべての立場に共通しています。しかし、その“行間”をどう見るかによって、神のご計画の受け取り方にグラデーションが生まれるのです。今日の説教では、最初にそのいくつかの立場をご紹介しますと思います。「へえ～、そんなふうに考える人もいるんだ」と驚かれるかもしれません。ですが、それは混乱を生むためではなく、神のことばの豊かさを共に味わうためです。そしてそのあとで、この 13 章が今の私たちの信仰生活にどんな問いを投げかけているのかを、共に聴いていきたいと思います。

【本論】

本論 1. 終末論の立場比較

ではここで、聖書を真剣に読む人たちの間で、どのように終末のビジョンが受け止められてきたか——主に四つの立場をご紹介します。やや難しい言葉も出てきますが、分かりやすくお話ししますので、肩の力を抜いてお聞きください。また、ご自身がどの立場に立っているか、という視点を持って聞いてくださると、より理解が深まると思います。

①「千年期前再臨説」——プレミレニアリズム

この立場では、キリストが再び来られた後に、千年にわたる平和な王国が地上に築かれると考えます。その間、サタンは縛られ、キリストが王として支配されるというビジョンです。この考えに立つと、黙示録 13 章の「獣」や「偽預言者」は、将来、実際に現れる反キリスト的な存在だと理解されます。世界の最後の混乱と悪の勢力との対決があり、その後にキリストの勝利がはっきりと現れる——そんな壮大な時間軸を描いているのがこの立場です¹。

②「千年期後再臨説」——ポストミレニアリズム

こちらは、キリストの再臨が千年王国の後にあるという考えです。少しいメージしにくいかもしれませんが、これは「福音がこの世界を変えていく」と信じる、非常に希望に満ちた終末観です。世界中で福音が広がり、やがて地上が神の国のように整えられていき、その“黄金時代”の後にキリストが来られる——そんな未来を夢見るような視点です。黙示録 13 章の「獣」も、この立場では歴史の中に現れる悪しき制度や権力の象徴とされます。

¹ 千年期前再臨説（プレミレ）には、更に「患難期」がいつ訪れるのかを巡る議論があります。この立場に立つ人々の間でも意見が分かれており、大きく次の二つに分類されます。

- ・ **患難期前携挙説（Pre-Tribulation Rapture）**：教会（信者）は「大患難」に入る前に、キリストによって天に携え上げられ（携挙）、地上の苦しみを免れると考える立場。この見解は、19 世紀に生まれた**ディスペンセーション主義**の影響を強く受けています。ディスペンセーション主義は、神の歴史的な取り扱いを複数の「時代（ディスペンセーション）」に分けて捉えるもので、とりわけ**イスラエルと教会を厳密に区別**するのが特徴です。この流れは、現在のアメリカ福音派（特に保守的な教会）に大きな影響を与えており、『Left Behind（レフト・ビハインド）』シリーズなどの大衆文化を通して広く知られています。
- ・ **患難期後携挙説（Post-Tribulation Rapture）**：信者も患難の時代を通過し、その終わりに携挙とキリストの再臨が共に起こると考える立場。初代教会の迫害経験を重ね合わせ、「苦しみの中でこそ信仰が鍛えられる」という理解に立つ人々も多く、歴史的には古くから存在してきた見解です。

③「無千年期説」——アミレニアリズム

少し聞き慣れない言葉かもしれませんが、「千年王国は象徴的な表現であって、今の教会時代そのものが千年王国なんだ」とする立場です。つまり、キリストは今すでに天において王として支配しておられ、その恵みが教会を通してこの世界に及んでいる——という理解です。この立場では、黙示録 13 章の「獣」は、過去・現在・未来を通じて繰り返し現れる反神的な力の象徴と考えられます。時代を越えて働いているサタンの策略が、様々な形で現れていると受け取る考え方です。

④「前再臨派」——プレテリズム

最後に紹介するのは、少し異なる視点から読む立場です。それは、「黙示録の多くの預言は、実は既に 1 世紀頃に成就したのではないか」と考える視点です。例えば、黙示録 13 章の「獣」は、ローマ皇帝ネロやその体制を象徴するものと解釈されます。つまり、これは初代教会の人たちが、今まさに経験していた苦しみをどう乗り越えるかというメッセージだった、と捉えるわけです。

⑤奥村の見方——歴史的多重成就モデル

さて、ここまで終末論の主な立場を四つご紹介してきました。「へえ～、こんなにいろいろな考え方があるんだ」と思われた方もいらっしゃるかもしれません。きっとこの中には、「私はこの立場がしっくりくるな」と思った方もいれば、「正直どれもしっくりこないな…」という方もおられるのではないのでしょうか。それで、少しだけ、私自身がどの立場に立ってこの講解説教を進めているかをお話ししておきたいと思います。私は——いわゆる「無千年王国説」に少し近いところに立っています。ただし、「千年王国＝今この教会時代」とは一概には言いきれないという思いも持っていて、それよりも、黙示録に書かれているビジョンは、一つの出来事が「重層的に成就していく」という読み方をしています。たとえば、黙示録 13 章に出てくる「獣」のような存在は、

- ・ 書かれた時代から見た近未来の迫害（ローマ帝国）を表しているとも読めますし、
- ・ 教会時代を通じて繰り返し現れる神に敵対する力の象徴とも見られますし、
- ・ 最終的な終末期に現れる、究極的な悪の勢力の現れでもある——

そういうふうに、複数の層を持って時代を超えて語られていると受け取っているのです。このような見方は、「歴史的多重成就モデル」と呼ばれることもあります。つまり、“一度で終わらない預言”、何度も繰り返されながらやがて完成されていく神のご計画を感じつつ、聖書を読んでいる——そういう立場だにご理解いただけたらと思います。

ですが、ここで大切にしたいのは、立場の違いによってお互いを裁いたり、分断を生まないことです。終末論には、いろんな解釈の可能性があります。そして、私たちの救いは、「どの終末観を選ぶか」ではなく、キリストを信じ、その愛に応えて歩むかどうにかかっているのです。ですから、「私は違う立場かもしれない」と思った方も、安心してください。こ

の講解説教では、私自身の理解をもとにお話ししていきますが、それは一つの「模索」であって、「これが唯一の正解です」という主張ではありません。むしろ、「神のことばをどう聞くか」をご一緒に問いながら歩いていく旅路として、この黙示録を皆様と共に味わっていきたいと思っています。

本論 2. 過去に起きた出来事——ローマ帝国と“獣”の時代

私たちが今日読んでいるこの黙示録 13 章——ここに登場する「海から上がってくる獣」は、現代の私たちには一種の“象徴”として読まれることが多いですが、この書が最初に読まれた 1 世紀のキリスト者たちにとっては、きわめて現実的な脅威を示していたことを、忘れてはなりません。この書が記された当時、キリスト者たちはローマ帝国の支配下にありました。特に問題となっていたのは、皇帝崇拝と呼ばれる宗教的な制度です。ローマの皇帝たちは、自らを“神”とし、民衆に対して礼拝を求めています。街の広場や神殿で、「カエサルは主である (Caesar is Lord)」と告白することが、忠誠の証とされたのです。しかし、初代教会のクリスチャンたちは、はっきりとこう言いました。「イエスこそが主である」。これが、命と引き換えの信仰告白——反逆と見なされる時代だったのです。

こうした文脈の中で、多くの学者たちは、黙示録 13 章に登場する「獣」は、当時のローマ皇帝——とくにネロやドミティアヌスを象徴していると見ています。皇帝ネロ（在位 A.D. 54-68）は、音楽や詩に秀でた一方で、晩年には狂気に陥ったと言われています。ローマの都市改造を進めるために大火を起こさせ、その放火の罪をクリスチャンたちに負わせて、壮絶な迫害を始めました。野獣の皮を着させて猛犬に襲わせる。コロシウムでライオンと戦わせる。そして、夜には火をつけて“人間松明”とした——信じがたいような、しかし事実として記録された迫害の歴史があります。そのネロは最終的に、民衆の信頼を失って自殺しました。ところが、その後、「ネロは死んではない。やがて戻ってくる」という“ネロ再来伝説”が民衆のあいだに広まります。この伝説では、東方のパルティア人の軍隊を率いて、ネロがもう一度ローマに攻めて来ると信じられていたのです。また、「ドミティアヌス皇帝こそがネロの再来だ」と恐れる人々もありました。このドミティアヌス（在位 A.D. 81-96）は、再びキリスト者に対する徹底した迫害を始めた皇帝でした。民衆は「だれが、この獣と戦えるだろうか」と嘆きながら、恐れと崇拝をもって皇帝に従っていったのです。

さて、こうした背景を踏まえると、13 章にある「獣は頭の一つに死ぬほどの傷を受けたが、この致命的な傷も治ってしまった」という描写にも深い意味が見えてきます。ある人はこれは、ネロが死んだように見えて、実は生きていて、また現れるという“再来伝説”の反映と見ます。ある人は、ドミティアヌスのように、ネロのような迫害が再び現れたことの象徴だと考えます。つまり、黙示録 13 章は、当時の教会が直面していた圧倒的な政治的・宗教的暴力の現実を描いているのです。

このように見ると、黙示録はただ未来の不思議なことを描いているのではなく、1 世紀の教会の人々にとっての“今”に語りかけていた現実の書であったことが分かります。これ

は「プレテリズム」と呼ばれる視点の一つで、「黙示録の預言の多くは、すでに1世紀の出来事として成就したのではないか」という立場です。この見方を受け入れるかどうかは別として、ここで大事なものは——この書が、恐れではなく、慰めと励ましを届けようとして書かれたということです。

本論3. 霊的現実としての“今”——獣は、ここにいる

ここまで、私たちは黙示録13章に描かれた「獣」の姿を、歴史的な背景や異なる終末論の視点から見てきました。そして一つの結論として、これは単なる“過去の話”でも“遠い未来の予告”でもない、ということを押さえておきたいのです。この「獣」は、今もこの世界で、さまざまなかたちを取って私たちに迫ってきている。私たちの時代にも、「自らを神とする力」があふれています。それは、名もなき個人の中に、あるいは組織や国家の中に——「人間こそがすべてを支配する」という思いが、知らず知らずのうちに広がっています。経済的な豊かさ、テクノロジー、自己実現、数字の競争——それらが、神なき時代の“礼拝対象 (idol)” になってはいないか。また、時には国家そのものが“偶像”になってしまうこともあります。「この国を守るためなら何をしてもいい」という思いが人の命や愛を踏みしめるとき、そこには“獣的な力”が顔を出していると言えるでしょう。さらに言えば、教会の中にさえ、“命のない宗教”という獣の影が忍び込んでくることがあります。宗教が形骸化し、権威主義が台頭し、愛や慰めが置き去りにされてしまうとき——神が求めておられる“霊とまことの礼拝”は失われ、そこには恐れと管理と支配だけが残ってしまいます。

このように見ると、13章の「獣」とは、この世に働く“神に逆らう霊的構造”の象徴として受け止めることができます。これは、アミレニアリズムや理想主義的視点とも重なる面があります。つまり——獣は「過去の歴史の中にただけでなく」、「将来いつか現れるだけでなく」、まさに“今ここ”で私たちに挑んでくる存在だということです。

では、私たちはどうすればよいのか。聖書は、「この獣に仕える者たちに名が与えられるが、いのちの書に名のある者たちは、決してその者を拝まない」と語ります(13:8)。ここにあるのは、恐怖ではなく信仰の勝利です。この“今”という時の流れの中で、私たちが何を拝み、誰に従い、どこに立つのか——それが問われているのです。

本論4. 未来の成就に向けた希望と警告——小羊の勝利と神の主権

ここまで見てきたように、黙示録13章に登場する“獣”は、過去にも現れ、今も形を変えてこの世界に存在し続けています。ですが——ここで終わってしまったのでは、恐れや無力感に覆われてこのメッセージを閉じることになってしまうでしょう。ヨハネがこの幻を記したのは、信仰者たちを脅すためではなく、励ますためだったはずです。この「獣」がどれほど強く見えたとしても、どれほど人々がその前にひれ伏したとしても——その支配は永遠には続かないのです。むしろ、黙示録のメッセージ全体を見れば明らかでしょう。「最終的

には、獣の力も、偽預言者も、バビロンも、サタンも、みな滅ぼされる」。これは、神ご自身の計画の中に、すでに定められている未来です。

ここに、未来主義的な視点——つまり、「やがて来る究極の戦いと勝利」を信じる終末観が力強く響いてきます。私たちには、すべての時代の「獣」を越える小羊——すなわち、イエス・キリストの勝利が約束されているのです。たとえどんなに暗く狂気じみた時代がやって来たとしても、たとえ神に従う者たちが少数派になったとしても、キリストはどの時代のどんな「獣」とも戦われる。それが、聖書が語る終末の希望です。このことを信じるとき、私たちは未来を恐れる必要がありません。むしろ、どんな時代であっても、信仰をもって立ち続ける者になれるのです。

【結論】

最後に、今日のメッセージを締めくくるにあたって、こう問いかけてみたい。あなたはいま、誰を「主」として生きていますか。あなたの礼拝の対象は、目に見える権力や物質的なものでしょうか。それとも、目に見えずともすべてを治めるキリストでしょうか。

どの終末観に立つかは、それぞれの信仰の旅路の中で少しずつ形作られていきます。しかし大切なのは、「どの立場に立つか」ではなく、最終的にどこに希望を置くのか。私たちの希望は小羊の勝利にある。主の再臨と神の国の完成にあります。そして、その日に向けて——今ここで主に従って生きること。これこそが、終末を生きる信仰者の姿なのです。

【祈り】

恵み深い天の父なる神様。この時代のただ中であって、私たちの心をあなたのことばへと向けてくださり、感謝いたします。世には、目に見える力、人を支配しようとする「獣」のような存在があります。時にそれは、国家や体制のかたちを取り、また時に、私たち自身の心の中にも潜んでいることを思わされました。しかし、主よ、あなたは私たちの名を、小羊のいのちの書に記してくださいました。私たちはあなたに属する者です。だからこそ、恐れることなく、どのような時代にも、主イエスに目を向けて歩みたく願います。どうか、この世の声に惑わされず、静かにあなたの声を聞き分ける力をお与えください。今日のこのみことばが、一人ひとりの心の深いところに染み込み、日々の歩みの中で確かな希望と慰めとなりますように。主の御名によって祈ります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
時代のうねりの中にあっても、決して見失うことのない、
小羊イエス・キリストの恵み、
どの時代にも、命の書に名を記す者を守り通してくださる、
父なる神の愛、
見えざる戦いのただ中で、静かに、確かに、真理へと導き続けてくださる、
聖霊の交わりが、
ここに集う一人ひとりと、またその家族と、友人と、この時代を生きるすべての信仰者の
上に、今も後も、限りなく豊かにありますように。